

工作通信

VOL.2 NO.4

毎月1回・10日発行

定価200円

カンテラ まつぎきたけとし 2
部落史認識の視点 松崎武俊 9

楽譜

走れ背番号10番・アチャキマンのブルース・おれの自転車

洪栄雄 12

その日がくる 康宗憲 15

第三世界の農民が日本の労働者にかたる

ペドロ・サンタクルス 16

労働組合と三里塚ワンパック

全国一般南部「いもの会」 17

SSK闘争二つの側面 久保田達郎 20

〈朝鮮語〉の学び方 VI

〈ハンゲル〉のつづり方と発音 李銀子 30



カンテラ⁽¹⁾

ぶん・え まつぎき たけとし

あたしや、一〇歳で坑内に下がった。父が炭坑のラクバン⁽²⁾事故で死んだき、その翌月から学校ばやめて、母がひくスラ⁽³⁾の後押しばさせられた。

ムラでは、別にめずらしい話じゃなが……

——いまでも、はじめて坑内に下がったときは、はつきりおぼえとる。

母が、あたしの手ばひいて鞍手の小さな坑内に下がったのが、明治四一年の三月三日、ちようどおひな祭りの日じゃった。母が「きようはバカの節句働きたい」ていうて笑うとつたがな。

そのころの炭坑は設備がわるく、坑道には電燈もついておらず、じめじめしたところじゃった。歩くと足半⁽⁴⁾のわらじがびちやびちやはねて、マブベコ⁽⁵⁾の裾にかかり、とても気もちがわるかった。

坑道⁽⁶⁾の天井から水玉がおちてくる。

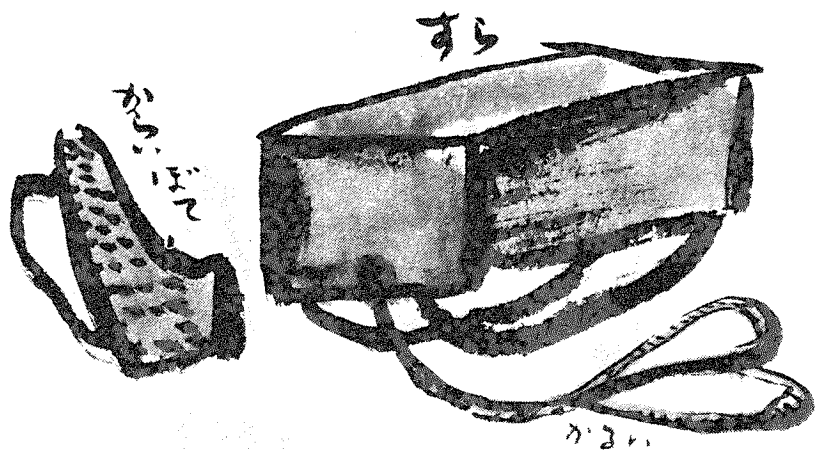
水玉が、首すじにあたるたびに、あたしや背中がぞつとして、思わず母にすぎった。

ほら、足もとばみれや。

あたしが、すがりつくと、母がカンテラで足もとば、低くてらし、手ば強くひいてくれたがな。

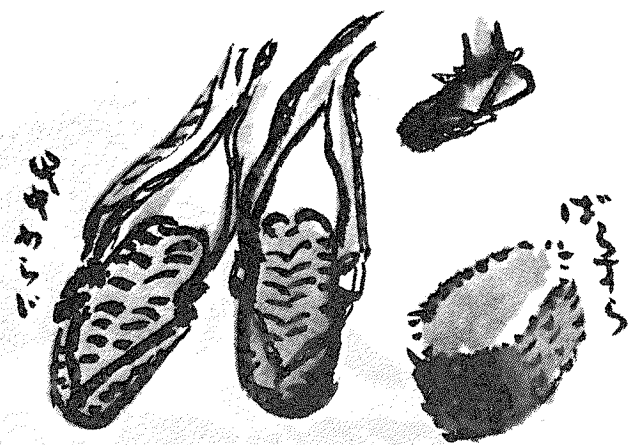
タネ、このおくにいくと、父ちゃんがいるぞ。

母が、あたしをこわがらせてやろうと思うて、わざというたどが、あたしには——



間もなく石炭ば掘るキリハにつくと、まっくろうよごれ
 た源じいさんが、カンテラであたしの顔ばてらしながら、
 ようきたきた、父ちゃんの分まではたらけや
 ていうて、あたしが頭ばくるりとまでくれた。その源じい
 さんの手が帽子のごと太かったことはいまもわすれん。
 源じいさんがサキヤマ⁽⁸⁾で、母がアトムキ⁽⁹⁾やった。サキ
 ヤマのじいさんが掘った石炭を、アトムキの母がガンズ⁽¹⁰⁾で
 かきあつめて、スラにほうり込み、それをカルイ⁽¹¹⁾で引くのが
 仕事じゃった。

スラいうても、いまの人にはわからんじやろが、スラてい
 うのは、キリハで掘った石炭をば炭車がとおる坑道まで運ぶ、



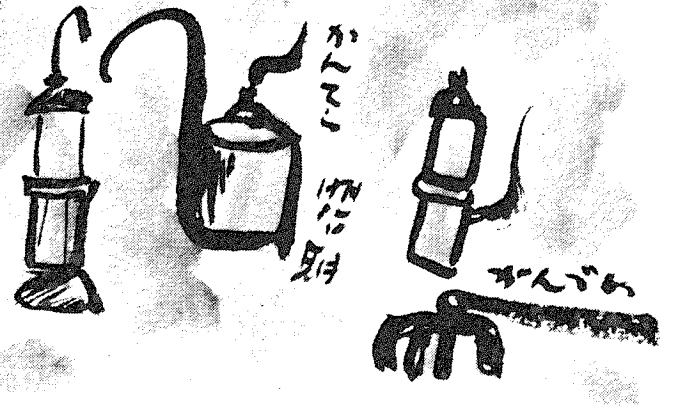
ひよっとしたら、このくらい坑内のどこかに、ラクバン
 で死んだ父ちゃんがいるのでは……いたら、きつとむかえに
 きてくれるかも……
 そんなことば考えつき、おぼろにうかぶ父ちゃんの顔ば、
 あたしや一生けんめいに思い出しながらはじめての坑内での
 こわさばこらえとった。

そのとききたい。まっくらしい底のおくの方でひかりがゆれ、
 人のけはいがした。

タネ、タネ、ようきた。

……………

……父ちゃんじゃない。あれは、坂下の源じいさんだ。あた



あのソリのついた箱たい。

——ばってん、あたしゃ小さかったけん、足がよろけたり、すべったりして、はじめのころは、スラを押すどころか引きずられてばかりじゃった。

こら、踏んばって押さんか。

母がどなるたびに、その吐息がな、後押すあたしにまで伝わって、小さいあたしにも、いたいほどようわかった。

——それでなあ

クソツタレメガ エークソ

ていうて、男のごたるかけ声ばして、あたしゃ歯ばくいしばって押したばい。

——ムラのもんな、一日でも働かにな、三度のめしが食えんじゃったき なあー

あとがき

この話は、一九七一年の五月ごろ、直方市の被差別部落外に孫の就職の都合で転住していたタネさん、当時七三歳から録取したものである。

故タネさんが話すには、被差別部落の子どもは女兒でも早い人は八歳ごろから生活苦のあまり小学校をやめ、父母とともに炭坑の坑内作業に従事する者が多かったと言う。

さらに、坑内での過労働は苦しかったが、炭坑がなくなった今では、若いころの想い出話として、むしろ懐しく笑ってすませられる。しかし、職場内で受けた差別迫害は、今日でも差別が生きているかぎり、笑ってはすまされないと付言した。

次の(1)～(11)の炭坑用語は金子雨石著『筑豊炭坑ことば』(名著出版社)による。

注

(1) カンテラ プリキや真鍮板で作った三寸型の容器に、燈芯を通す筒を付け、石油と種油の混合物を入れ木綿糸の芯を使って点火し、坑内の照明にしたもので、明治時代の炭坑ではすべてこれを使用した。提手は手元を丸く曲げて先端を鋭く尖らし、これを柱に打ち付けて掛燈にした。鋭くした部分を

火明しと称し、燈火の芯掻きに兼用したが、提手は取り外しが可能であった。

(2) らくばん(落盤) 重圧のため天井に亀裂を生じ、それが破壊して崩落すること。「ばれる」「ばれた」などという。

(3) すら(櫓) 採掘した石炭を切羽から曲片まで、街道を「かいる」と称する曳綱で運搬する櫓状の木箱。櫓は、櫓台という弧形厚板製の台木に帯鉄を打ち、これに長方形の木箱を乗せ、前後に鼻屈輪という鉄環を取り付けたもので、容量は二杯櫓・三杯櫓と称し、炭車一函に二～三杯であった。

(4) あしなかわらじ(足半草鞋) 明治・大正の頃「せな」や櫓引きに女坑夫が使用した草鞋。爪草鞋ともいった。紐を通す乳も一対だけあった。

(5) まぶべこ(間歩べこ) 「へこ」は禪の方言。男子用も婦人用もすべて「へこ」と称した。間歩べこは炭坑坑内で女坑夫の使用した腰巻。屈んだ仕事をするので、後が少し長く前のはなはだ短い超ミニスカート。

(6) こうどう(坑道) 坑内には縦横に各種の通路が掘進され、これらすべて坑道という。その目的・状態などで捲卸・入道・排気・堅坑・斜坑・曲片・水平などいろいろの名称があ

る。

(7) きりは(切羽・切端) 石炭を採掘する場所。昔から石炭を掘ることを「切る」といったが、つまり炭層を小口から切り取ることで、その場所は切り取った小口という意味から切端とも書かれた。

(8) さぎやま(先山) 仕事に熟練した、経験のある先達。後山を引き回して作業の主要部分を遂行し、後山を指導する。せきになさぎやま(責任先山) 旧式の採掘では先山一人・後山一人の一先制であったが、長壁式採掘になって多数共同作業制を採り、この団体を統率する責任者を選んだ。これが責任先山であり、単に責任とも呼んでいた。

さき(先) 初期の炭坑では一人が掘って一人が運ぶという作業基本から、先山一人に後山一人を一組として残柱式小切羽のそれぞれに配置するようになった。この二人一組を先と称して、作業の一単位とした。掘進も仕繰も二人一組を最小単位として取り扱った。

さし さし向いの意味で、二人一組のこと。先ともいった。

(9) あとむき(後向) 後山。筑豊地方では古い時代、後向とだけいっていたようであったが、後には双方使っていた。事務的には後山と書いた。肥前方面では以前から後山とのみだったのであろうか。

(10) がんづめ(雁爪) 掻板と同じ仕事をする道具。特に塊状のものを取り扱うのによい。掻板と異なる所は、鉄板の部分が四つ又の爪になっていることである。農具の田草を取る雁爪は爪が大きく湾曲しているが、この雁爪は湾曲がない。

(11) かるい・かるい 櫛運搬に使用する引綱。両肩に掛ける麻の打紐の末端を一本にして、その先端に鉋を付け、これを櫛の前環、「鼻屈輪」に掛けて引き出す。肩に掛けることを「かるう」または「かるう」という。「かるう」は豊前言葉、「かるう」は筑前言葉である。

部落史認識の視点

松崎武俊

一 はじめに

ここに一つの試みとして、皆さんのまえに次の問題を提起します。それは、従来の、そして今日の部落史にたいする「見かた」・「考え方」についてであります。この「見かた」・「考え方」を変えることによって、あらためて部落の歴史にたいする「認識」と「理解」を深めていこうというのが、私の問題提起のねらいです。しかし、次に提起する拙見が、ただちに部落の解放に速効的な薬石効果をもたらすとは思いませんが、ほんの少しでも部落解放の一端に役立てば、とねがいがいから、あえて大胆に提起を試みる次第です。

言うまでもないことですが、今日の部落問題は、他の政治問題や労働の問題などちがいがい、過去の歴史に大きなかわりをもっていることは周知のとおりです。このことは、同対審査申の中でも「いわゆる同和問題とは、日本政府の歴史的発展の過程において形成された身分的階層構造に基づく差別により……」と部落問題と歴史との密接な関連性を指摘しています。したがって、部落問題の歴史的

研究の目的が、たんなる学術的な問題ではなく、わが国の歴史発展の過程において形成された、差別的な社会経済構造を科学的に解明することになり、そのことによって、解放への展望を明らかにしていくことが、今日の部落史研究の重要な課題となることは言うまでもありません。

二 部落史認識の視点

部落史の研究は、ここ四、五年の間に急速に進みました。しかも、個々の地域での史実発掘は、実にめざましいものがあります。そして、それぞれの地域に根ざした部落史をもとにした啓発活動もまた活発化しています。

ひところみられた、幕府直領や譜代領の多い関東・畿内地方の部落史が、あたかも全国あらゆる地方の部落史に適合するかのごとく考えられた時代は過ぎさりしました。最近では〇〇地方とか、〇〇藩におけるなどとサブタイトルをかならず付記するのが研究者の常識になっています。

では、地域性がなぜ必要かを、身近な福岡県に例をとって考えてみましょう。

幕藩期に県内を分割・領有していた筑前福岡藩(四八万石)、豊前小倉藩(二五万石)、筑後久留米藩(三〇万石)、同柳川藩(二〇万石)〔小藩を除く〕での部落の形成と展開の過程、それに部落差別を支えた、当時の社会経済的基礎等々は、各藩それぞれいづれをとってもちまらちでした。

たとえば、部落の人にたいする呼び方一つにしても、幕府譜代であり九州探題ともいわれた小倉藩では、元禄期(一七世紀末)ごろから徳川幕府の「公称語」にならない、容赦のない「えた」の名称で統一しましたし、外様大名の福岡藩では、一部の役人とインテリ層を除けば、一般に「かわた」といい、久留米・柳川の両藩は、古風な「長吏」の名称を使っていたのです。

このように、各藩各様であるところから地域に根ざした、その地域の部落史の発掘・研究こそが重要であり、これらの個別の研究の積み重ねがあつてはじめて、全体としての部落史が論じられると思うからです。

次に、従来の、そして今日においてもなお、部落問題の啓発教材として使われているものの中に、一つの共通項として流れている部落史認識が三つほどあります。

一 部落の歴史があまりにも「差別」そのもの、「残虐」そのものの歴史であるということ。

二 部落の人たちの職業が、幕藩期の「生業」(皮革の精製・行刑の作業・草履作りなど)のみの紹介に固執し過ぎているという

こと。

三 部落の人が携わった「生産」と「労働」の評価が等閑に付きれ過ぎていているということ。

あげられます。しかし私は、何も部落の歴史が「差別」の歴史ではなかったとか、右記のような「生業」に全く従事していなかったと言っているのではありません。部落の歴史はまさに「差別」の歴史であり、そしてまた宗教的に賤しいとみなされた、いわゆる「賤業」につかせられたのも事実です。しかしこの歴史的事実をふまえた上で、あらためて部落史の新しい「見かた」・「考え方」、いわば部落史認識の新しい視点を検討していこうと思つてゐるのです。

1 「差別」の歴史と「生業」

部落の人たちの職業といえば、まず一般的に「殖牛馬の処理」があげられます。部落の人が身分的「生業」として殖牛馬の皮剥ぎを強制されていたことは間違ひありませんが、皮を剥ぐのは人間生活に欠くことのできない「皮革製品」を生産するためであつて、ただ強制されたがためにのみ、無目的に剥いだものではありません。

皮革を精製するには、殖牛馬―集荷―皮剥ぎ(骨・爪は小間物細工に用いる)―集荷―荒皮手入―塩漬(又は天日干し)―集荷―水漬(河の中にさらす)―脱毛(毛の一部は筆毛に用いる)―皮すき(これより後は、高度の技術を必要とする)―油もみ(馬油を用いる)―色付(白なめしは色を用いない)―仕上(集荷―革細工等々の一五、六工程を経てはじめて製品化されるのですが、「極上等の鞆革」ともなれば、さらに五工程ぐらいの作業を経なければ「極上物」には仕上りません。

問題は、このようにして精製された皮革製品が、美術品あるいは生活必需品として私たちの日常生活のなかにとけこみ愛用されてきたにもかかわらず、それ相応の価値評価を受けず、しかも数十工程のなかの一工程に過ぎない「皮剥ぎ」作業のみをとらえて、それがあたかも部落の「代名詞」的にまで言われることにあります。それはなぜなのでしょう。一例をあげてみましょう。

昨年(一九七八)年二月一日付「西日本新聞」の夕刊に「皮はぎ・三味線に」という残酷なトツプ見出しで、野良猫を捕かくして皮を剥いだあと、その内臓を山野に捨てたのが発見され検査された記事が出ておりました。「汚物遺棄」は軽犯罪法に触れるかもしれませんが、「皮はぎ」は犯罪行為ではありません。また、雑誌『ふるさと展望』の昨年一〇月号に戦国期の皮工業者の生活を紹介した一文の見出しとして、「中世の原動力被差別民―皮はぎ乞食、不浄の集団という差別を打破―」とつけています。これは一部の民衆のなかに潜在するところの宗教的触穢思想―職業賤視思想を逆撫ですることによって差別意識を想起させ、読者の購読意欲をそそろうと考へての見出しでしょうが、これは誰かがやらなければならぬ生産と労働を封建制的発想によって否定していることです。この中には職業賤視―部落賤視に短絡していく危険性を十分にはらんでいるといえます。

2 「生産」と「労働」の歴史

部落の人たちの職業といえば、前述しました「生業」が一般的な考え方ですが、果して「生業」のみで部落の生活を支えることができただでしょうか。ごく一部の人にかぎり「生業」による収入のみで

生活ができなかったかもしれません。しかし、残る多くの人々は、「副業」として規制された「部落農業」にその生活基盤を置いていました。「部落農業」とは二反から四反程度の零細な持高を主軸に、「請作」・「又小作」あるいは「農業日稼」をもふくめた農業生産への積極的参加を指すのですが、地方によって土地の取得を許可しない藩もありましたのでいちがいにはいえませんが、多くの場合にとりこたで考へることが出来ます。とくに「部落農業」のなかで重視しなければならぬのは、逃散などによる農業労働力の決定的不足によって惹起しかけた本村の崩壊を低賃銀過労働という不利な条件のもとで、いわば「請作」・「又小作」・「農業日稼」等々の零細経営によって部落の人たちが肩がわりをし、これを防いだということです。このことは注目に値します。

三 むすび

このように農業生産の上でも、労働の上でも、部落の人々がきわめて重要な役割りをはたしていたにもかかわらず、何故にこうした部落の人々の「生産」と「労働」の歴史が、正當に評価されなかつたかを考へてみる必要があります。そして、私たちの日常生活のなかに、あるいはまた学校・社会教育のなかに部落に対する評価が今もなお幕藩社会的な見方の中に留まって生きつづけている事実を、これこそ払拭しなければなりません。

私の今回の報告は、まさに部落の人々の「生産」と「労働」が不当に抹消された歴史に対する再評価を、いま一度虚心坦懐にとらえ直してゐることを提起したものです。

アチャキマンのブルース

洪 栄 雄

アチャキと言うのはヘップサンダルをつくる時のキカイのことです。ぼくがすんでる生野区では、おおくの人がヘップサンダルの仕事をしています。中学二年ぐらいの時、友達が毎日家にあそびにきてはいっしょにギターをひいて歌っていました。その時友達がいつもアドリブでチャチャチャ、チャキマンと歌い「家に帰りとうないわ、帰ったらまたアチャキふまされるわ」となげいていました。その時の事を思いだし、自分でヘップサンダルの仕事をしながらつくった歌が「アチャキマンのブルース」です。

アチャキマンのブルース ホンヨシユン 洪 栄 雄

Musical score for 'Acha-Ki Man Blues' in G major, 4/4 time. The score consists of four staves of music with lyrics underneath. Chords A, D7, and E are indicated above the notes.

のりのにおい プン プン プン アチャキのあと シュ シュ
 シュ アチャキふんで 日が くれてく
 チャチャチャ チャキマン チャチャチャ チャキマン チャチャチャ チャキマン
 チャチャチャ チャキマン アチャキふんで あしたのき た ら

- ① のりのにおい プン プン プン
 アチャキの音 シュ シュ シュ
 アチャキふんで 日が くれて
 (リフレン)
- ② ソコをはって シュ シュ シュ
 はこにつめて シュ シュ シュ
 アチャキふんで 日が くれてく
 (リフレン)
- ③ 今日も一足 シュ シュ シュ
 これから二足 シュ シュ シュ
 アチャキふんで 日が くれてく
 (リフレン)

走れ背番号10番

ホン ヨシユン
洪 栄 雄

- ① Am Dm Am E_7
 背番号10番が走る おれの怒りと悲しみ持って
 a e' c' d' a c' b a b
- Am Dm Am E_7
 背番号10番が走る おれのやさしさとさみしさ持って
 a e' c' d' a c' b a b
- Dm Am Dm E_7
 おい打てよ! おい打ちつづけるよ!
 e' f' c' e' e' f' a' g# b'

- ② 背番号10番が打つ 背中におとされた原爆を打つ
 背番号10番が打つ 飛んでくる日本刀を打ちかえす
 おい走れよ! おい走りつづけるよ!

Dm Am Dm Am
 おい張本走れよ! ぼくもいっしょに走るから!
 e' f' c' e' e' f' a' f' e'

- ③ 背番号10番が走る おれの怒りと悲しみ持って
 背番号10番が走る おれのやさしさとさみしさ持って
 おい打てよ! おい打ちつづけるよ!

Dm Am
 おい打てよ!
 おれの悲しみを打てよ!
 おれのさみしさを打てよ!
 おれのやさしさを打てよ!
 おい打てよ!
 北を北を打てよ!
 南を南を打てよ!
 日本人を打てよ!
 おれのむねを打てよ!



(ことばの下の小文字はふしの音)

그날이온다

その日がくる

カン ジョン ホン
康 宗 憲

그 날 이 온 다 (その日がくる) 칸 조 홍
康 宗 憲

자 유 의 사 백 리 자 민 주 회 복 의 그 날 이 온 다
自 由 의 사 백 리 자 민 주 회 복 의 그 날 이 온 다
自 由 의 사 백 리 자 민 주 회 복 의 그 날 이 온 다
自 由 의 사 백 리 자 민 주 회 복 의 그 날 이 온 다

在日韓国人政治犯、11・22事件で死刑判決をうけた康宗憲が獄中でつくった歌。世界各地の集会でうたわれている。

自由をもとめ たたかう道で
牢獄は不死鳥そだてるどころ
銃剣をもつものたち ゆくてにたつとも
かたい心はくだけはしない
民衆の心に自由のたねまこう
民主回復の その日がくる

統一をもとめ たたかう道で
牢獄は青春の火がちるところ
くらい雨風 ふきあれようとも
もえるほのおは消せはしない
民族の胸ふかく統一の木をうえよう
祖国統一の その日がくる

おれの自転車

洪 栄 雄

① G Em D G
冬でもまっくろに 日やけた顔
b g e a d e
G Em D G
ついこの間まで つるはしもって働いてた
b d'e'd'e a g d g

② おれの親父と いっしょに海をわたった
もう何十年 のみ友達 親父の

(リフレン)

C G
さい近じゃ 自てん車つくった
g g a g e d
C D
おれの自てん車も おっちゃんがつくった
g g a g e e d a b a
Em D
いまでも走る おれの自てん車
e'd'e'd'e' e' d' b a
Em D
どこへでもいける おれの自てん車
e' d'e'd'e' e' d' b a
C G D G
なのに あのひと 今じゃ 空のうえ
b a g e d g a a g a g

③ アルコール中毒で 病院にはいった
のむとすぐにケンカ でもやさしかった

④ いち番上の息子 その日ぐらしの仕事
に番目の息子とむすめ 家でミシンふんできた

(リフレン)

どこへでもいこう おれの自転車で!

第三世界の農民が日本の労働者にかたる

ペドロ・サンタクルス

友人たち！

日本について一週間です。まわりをみると、みなさんはある意味ではたいへんゆたかだとわかります。高いビルがたくさんあるし、工場も綱鉄でできている。テクノロジーは高度に進歩しています。でも、いろんな意味であなた方はたいへんまずしい。空気はよござれ、海の水もきたなくて魚も住めないのです。食糧は第三世界の国々にたよっているそうですね。

だれかのはなしでは、日本の一億一千万人をやしなうのに、六十万人の農民と漁民しかいない。

日本ではテクノロジーが急速に発展して、いまに土地が全部工場にとられる時がくるでしょう。コンピューター・テクノロジーのために、少数の労働者しかやとれない時がくるでしょう。

日本の子どもたち。かれらはどうなるでしょう。その未来はどうでしょう。

第三世界の農民と漁民が自分たちでたべる分のために、あなた方に食糧をおくらなくなつたとしたら、どうしますか。日本政府はインドネシアに石油供給をたよっています。インドネシア人民が自分たちでつかうために、この供給をたちきつたら、どうなるでしょう。

コメをたべるとき、このコメをつくつたのはだれか、かんがえたことがありますか。魚を料理するとき、この魚をつかまえたのはだ

れか、かんがえたことがありますか。たべもの自体に注意するだけでなく、それをつくってくれる農民や漁民のこともかんがえてください。

たべるのは生きるため。生きるのはたべるため。いのちのみなもととは、どの国でも**農民と漁民**です。

農民と漁民は木のようなもの。木はきれいな葉、つよい枝、たくさんの実をつけます。葉や枝や実は労働者であり、学生、専門家、知識人などで、ふつうみんなの注意と関心をあつめます。木の根にはなかなか気がつかない。地のおくふかくあるからです。枝や、葉や実をとつても、木はまだ生きるでしょう。根をうばわれた木は死ぬのです。

日本の農民と漁民が土地から根だやしにされたら、テクノロジーにつよくても日本はおとろえ、すぐにほろびるでしょう。

日本の活動家、心ある労働者によびかけます。人民のたたかいはなかで農民と漁民が無視されている国では、勝利はむずかしいですよ。

資本主義に対して日本人民を組織する大義と努力が勝利するのは、農民と漁民がたたかひの先頭にたつときです。たとえ農民と漁民の数がすくないとしても。

これがみなさんへの、わたしの問題提起です。

労働組合と三里塚ワンパック

全国一般南部支部「いもの会」

先日、われわれ「いもの会」の会員がどこに居住しているかを調査して、図にしてみました。

ある程度予測していたことではあつたのですが、かなり広範囲に散在していることが明らかになったのです。行政区域でいえば、一部三県（千葉、埼玉、神奈川）にわたつていました。

「いもの会」のデポは神楽坂です。ここを基点に一番遠い人は、皮肉なことに三里塚にも近い千葉県四街道町に住んでいました。およそ二時間弱のところ。その他にも、鎌倉、春日部、立川、国立など、一時間以上かかる人が何人もいます。

「いもの会」は労働組合に結集する仲間たちでつくつたもので、現在三七パック・五〇名の会員数です。われわれが三里塚微生物農法の会と結んで、有機農法による野菜の購入活動を始めた当時は、消費者側は居住区域を拠点にしたものが多く、労働組合で購入するのは少なかつたのです。

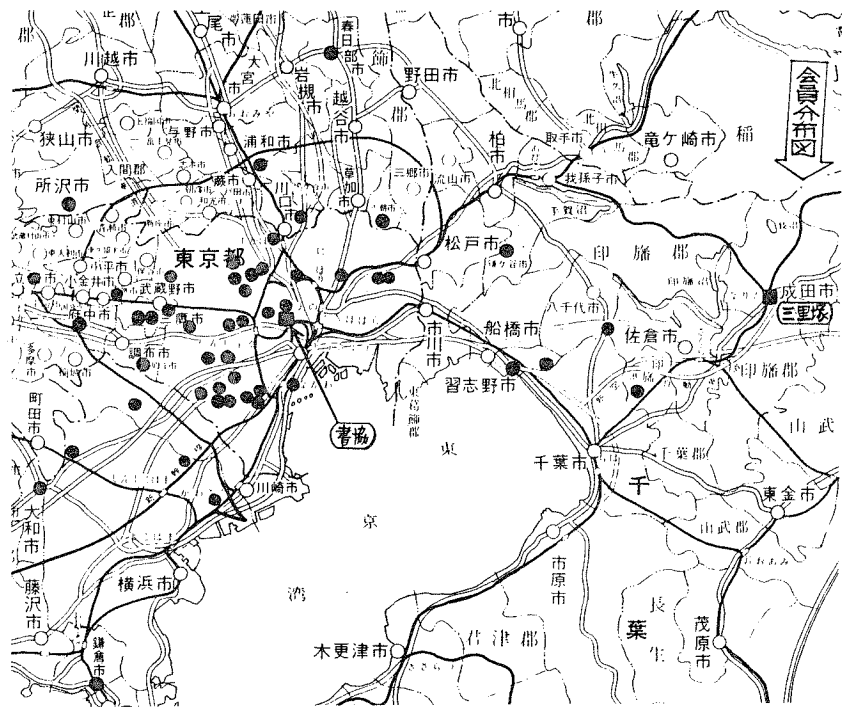
私たちは、労働組合で購入活動を行なうことに固執しました。居住地域がバラバラで、遠隔地に住む人も多いため、デポからの運搬の点で無理がでてくる懸念は大いであつたのですが、それでも労働組合として購入活動に取り組むことに意味があると思つたからです。最も大きな意味として考えていたことは、

三里塚闘争とのつながりです。

私たちの全国一般南部支部では、三里塚空港廃港の闘いを、組合総体で継続的に闘っています。その多くは、現地での諸闘争、現地への援農、という形でした。そうした中で、「三里塚の農民との真の連帯とは」という問題をいつも考え続けていました。そうすると単なる現地での実力行動だけでは、決して豊かな関係は生まれてこないのではないかと、という疑問がでてきたのです。

農民の生活とわれわれの生活が、ある種の緊張関係をもつて結びつくことが必要だ、と考えたのです。そこから、有機農法による野菜の購入活動を行ない、われわれ自身の生活

いもの会関東全域を制圧!?



のあり様を問い直してみよう、とワンパックの購入活動に入ってしまったのです。

「労働組合が生活のあり様を考える、なんて、ちょっと奇妙だ」と思われるかもしれませんが、しかし、私たちは、労働組合というのは、全生活領域にわたって組合員相互が話し合い、問題解決を図るものだ、と考えています。私たちにとっては、生活問題を労働組合で考えることになんの違和感もないのです。

したがって、購入活動に込めた私たちの思いは、第一には三里塚闘争と深いところで結びつきたい、というものですが、その他にも多くのことがありました。

一つは、野菜購入が「食生活」の領域です。から、組合員の家族をもまき込んだものになるわけです。組合運動に家族も積極的に参加させたい、その場として共同購入をやっている、というもの。

二つには、食生活から始まって、石油づけにされた生活のあり様を考え直してみようというもの。

三つには、ワンパック野菜購入を手がかりに、それぞれの会員の居住地域で生活の見直しや三里塚闘争への共感を得るような動きを作り出せはしないか、というもの。

ワンパック野菜を購入し始めてから、ほぼ一シーズンが過ぎようとしています。多少、組合内部での広がりや鈍い感もありますが、まずは定着しています。今後も、労働組合が共同購入する、という原点到固執し続けたいと考えています。会員の居住区域別にバラしていく気はありません。

職場と家庭が分断され、生活の一部分である仕事の面だけつながりやすい労働組合、そして、それ以上の生活局面が個別に寸断されている現在、全生活領域を共有し合う労働組合の関係をつくりあげていく一つの方法として、ワンパック野菜購入活動を続けてゆくとともにあります。

最後に余談を一つ。ワンパックが家庭で最も喜ばれたのは、昨年暮からです。ご存知のとおり、野菜はバカ高値。ワンパックは一年間単品の価格は変わりませんから、相対的にウソと安くなったわけですが、奥さんから大いに見直され、ワンパックをやって良かった」と涙した男性会員もいたとか……。

(文責・石川秀憲)

会員の多くは、野菜の重さ以上の重さを感じたものです(少なくとも私は)。

しかし、そうした「障害」にもめげずに、職場から神楽坂に、神楽坂から自宅へ、のコースが、生活のサイクルに定着してくるにつれて、ワンパック野菜も家庭に定着し始めた。

かなり大量に入ってきたニラやゴボウ、そしてジャガイモ、人参などを、ムダにしないような料理法を交換し合ったり、他で野菜を買い回数が増えたり、など……。また、当初冷たい反応だった家族が、口うるさい会員の説得が効を奏してか(？)、生協活動に興味を示し始めたり、洗剤を見直すようになったり、と、私たちが考えていたことが少しずつ現実化したのです。

また、それまで弁当を持ってきたことのない人が、弁当を持ってきたり、あまつさえ、最近早くウチへ帰りたいようになってきた。家で食えることが楽しみになってきたし、自分で料理することがふえたみたいだ」と言い出す男性会員も現われてきています。ある意味では、家庭内の夫婦の関係さえ作り変える契機に、ワンパック野菜購入がなっていると云えるのではないのでしょうか。

大体こういつたことを、ワンパック野菜に込めたわけです。

会員は大きくわけて当然のことながら、二つに大別されます。家族世帯と単身世帯です。家族世帯の方は大半が男で、単身世帯は主に女性が多くなっています。

最初のうちは大分ギクシャクしていました(今でも多少はありますが……)。

ある家庭では、夫が重たい思いをして野菜を運んで来て、誇らし気に「どうだ、これが無農薬野菜だぞ」と渡したところ、奥さん日く「ナーニ、これ、葉っぱは黄色くなってるし、ちよつとしなびてるし。八百屋で捨ててる野菜クズじゃないっ。おかげで何日間か夫婦間に冷たい戦争が続いたそうす。

またある家庭では、結局ワンパックだけじゃ済まなくて、お店で野菜を買うことになった。ワンパック分だけ余計の支出になるワ」と奥さんがつむじを曲げた、とか……。

単身者になると、ワンパックを二、三人で共有するケースが多いのですが、それでも二週間に一回のペースでは量が多すぎてムダにしています、といったことがありました。

ワンパック野菜購入を始めてから何日かは、そんなこんなで、野菜を袋につめて帰宅する

SSK闘争二つの側面

長船労組 久保田達郎

SSK闘争が妥結をしたその日、労働組合佐世保労愛会の国竹会長が、真っ先にお礼のあいさつに行ったのは、どこだと思われようか。地区同盟でもなければ、ましてや県評・地区労ではなかった。陸上自衛隊佐世保地方総監部だったのである。自衛隊幹部を前に、国竹会長は、長期闘争のわびを述べるとともに、原子力船「むつ」改修工事の早期着工を約束した。

国竹会長は語る。

「SSKの前身は佐世保海軍工廠。労愛会はSSK設立前に結成され、軍需工場の存続、発展に尽くした。労使協力は労愛会の伝統です。その意味では、闘争で何も変っていない」(「朝日新聞」80年2月26日)

五九二時間(二十四日と十六時間)に及ぶ長期スト。最盛期の約半数になったとはいえ、三千五百名を擁する「大企業」。しかも、その労働組合は、日商会頭・永野重雄をして「日本の組合」と賞賛

されたJ.C傘下の御用組合。まさに、SSK闘争は「異例」であった。

闘争が終結した今日、異口同音に語られる評価は、組合の「完全勝利」、会社の「完全敗北」である。同盟幹部ならいざしらず「左翼」を自称する諸君からさえ、そうした声がでるのは、一体どうしたことでろうか。これで、八〇年代労働運動の展望が切りひらかれた。バラ色の幻想をふりまく者さえあらわれている。八〇年代労働運動は、ことごとくように、混乱しているのである。危機、といわずしてなんといおう。

造船重機労連と佐世保労愛会

労愛会幹部が、坪内の辞表をちらつかせた「桐喝路線」に屈服し三項目の合理化(賃金の一五%カット。定昇・ベア・一時金の三年

間凍結。週休二日制の廃止)を受諾したのは、ちょうど一年前の二月十六日であった。その前日の労愛会代議員会は、六時間にわたって激論が続いた。労使協調の組合で、長時間の議論そのものが異例だが、そのうえ採決にまでもちこまれ、賛成七二票に対し、反対は三七票であった。労使一体となった代議員の個別オルグ。反対者には、坪内顔まけの「倒産攻撃」。だが、それでもなお三分の一強の反対が表明されていたのである。

職場労働者の強い不満同様、三項目合理化丸のみに反対を最後まで貫いた者がいた。労愛会の上部組織、造船重機労連である。昨年一月十一日、その労連は「合理化妥結のための最低基準」なるものを決定し、指示した。

①賃金カット一五%は、自主解決を認める。

②ベア、定昇、一時金はその都度協議をする。

③週休二日制の廃止については、最低隔週二日制を維持する。

というものである。五十歩百歩、という感をまぬがれないが、だが労愛会幹部は、上部団体の「指示」さえ返上したのである。

本年三月十一日付『経済界』は、その間の両者の葛藤を、次のように「解説」している。

「労愛会の上部団体である同盟・造船重機労連は、この『三項目』受け入れを強く非難、『統制違反』までちらつかせて、闘うことを主張したものだ。しかし国竹会長の『重機労連が再建してくれるわけではない』ということばに、上部団体も沈黙せざるを得なかったのである」

同盟幹部のいびつな争いがそこにはあった。

一見すれば、労愛会執行部の「右派」に対し、労連は「左派」として登場しているように見える。そして、この構図は、今次闘争を通して、いっそう助長された。方針の決定、ストライキの戦術、妥結時の対応、門前ビケの指導に至るまで造船重機が行なったのである。「今回の闘争の第一の特徴は、上部団体である造船重機労連(藤井久米雄委員長代行、十九万人)の完全主導下で推進された点である」(「長崎新聞」80年2月15日)と指摘されるとおりといえよう。

「労愛会の幹部はダメだが、重機はたいしたもの。残念ながら、SSK内部で闘う労働者のかんりの部分にまで、そうした評価をつくりだしている。これもまた危機である。」

造船資本の代弁者・造船重機

では何故造船重機はかくもハッスルしたのか。彼らの思想が変わったのではもちろんない。いや、労使協調に徹するがゆえに、彼らは全力をあげた、といった方が正確であろう。

昨年の八月二十八日から三日間、造船重機労連は、第九回定期大会を開催し、一九八〇年度の運動方針を決定した。その一項目に奇妙な方針を見ることができ、「産別公正労働基準づくりの闘い」なるものがそれである。

本来、産別組織の労働者は、同じ労働条件を基準に「公正な企業競争、同業種内の共存共栄による産業の発展」を図るべきものだが、最近「異端者」があらわれたとして、次のように述べている。

「低賃金、長時間など劣悪な労働条件にあるアウトサイダー(来

島、常石、幸陽、今治など)が、その低コストを利用して低船価受注に狂奔し、世界的な海運市場低迷による需要減少に加えて、低船価、赤字受注に拍車をかけることになりました。これらが、造船重機労連傘下の中級、中小造船に重大な脅威を与えたとともに、企業存亡の危機に陥し入れようとしています。

そして、これは「絶対に許容できない」と決定した。「米島」とは坪内寿夫ひきいる米島どつくであることはいままでもない。

「SSKが、このまま超合理化体制で再建すれば脅威だ。造船界の秩序が乱れる」とは「山口県内の中堅造船所幹部」の発言(読売新聞 80年2月14日)だそうだが、「脅威」に思っているのは、何も中小造船だけではない。三菱重工長崎造船所の会社幹部も「造船界の三悪人」として、重機同様、米島、常石、幸陽の三社をあげ「低船価時代に拍車をかけるもの」と弾劾するのである。

「安い賃金で船をつくり、競争力があるなんていわれたのではかわない。払うものは、人並みに払ったうえで、競争してもらいたいものだ」(「財界」80年3月11日号)という「大手造船メーカーの批判」まさに、労使一体となった「反坪内」コールである。

今次SSK闘争を、住友重工浦賀造船の第二組合は「平準化闘争」と呼んだ。まちがってはいけない。「平準化」とは、労働条件の到達闘争ではなく、船価・コストの平準化である。

たしかに「三項目」合理化の結果、労働時間は、七八年一九六八時間が二三六八時間に。時間当り賃金は、七七年二二八四円が六四一円に激減した。賃金は半分以下、労働時間は四〇〇時間(五〇日)の増。SSKの船価は、韓国の現代造船と比べ、賃金はSSKが若

干高いが、生産性ははるかにSSKが優れている。トータルではSSKの船価が低い、という重機労連幹部の指摘は、あながち、ハッキリでもなからう。

かくして、昨年一年間の鋼材使用量では、三菱重工を抜いて、米島グループが、トップにおどりでるにいたった。

「再建の歌」は反撃の序曲だった

佐世保市日野町に、SSK菅原研修所なるものがある。悪名高きD₂P教育は、この菅原研修所で行なわれた。朝六時半から歩行訓練、発音練習から始まり、夜は十二時、いや、二時、三時になることもある。徹底したミーティング。教育に参加したSSK労働者Fさん(45歳)は、「あれは人民裁判ですよ」といった。二日間の教育の最後は「再建の歌」を全員で合唱した。軍歌「露営の歌」のメロディにのせて……。

一 再建するぞと勇ましく

誓って菅原出たからにや

黒字出さずに死なうようか

坪内ラッパ聞かたびに

まぶたに浮かぶ妻の顔

二 世界一と勇ましく

誓って職場に来たからにや

賃金カットもなんのその



同盟会長 宇佐美忠信



佐世保重工業社長 坪内寿夫

工長ラッパ聞かたびに
まぶたに浮かぶ三年後

「勝つて来るぞと勇ましく……」この軍歌が「露営の歌」ということを、わたしは今回はじめて知った。歌詞は勇ましいが、メロディーそのものは、哀愁がこもっている」とわが組合の先輩はいう。彼は元々「うたごえ」の指導者である。元来、自他ともに認める音痴なわたしは、その指摘をそのまま信用する以外にない。ともあれ、SSKの現実には「看板時間」の導入にみられるごとく、徹底した合理化が始まる。毎日毎日、職場の監督者が、その日のノルマを記入していく。「看板時間」とよばれる。一日に、溶接棒を六十キログラム消化した労働者には、副所長が表彰した。シャープペンシルが一本贈られた。「三項目の合理化受け入れ時に爆発した不満も三年間の辛抱」という空気になった」とSさんはいった。

だが、労働者の意識は、環境によって決定される。三項目の受け入れは、当然ながら大幅な減収となった。昨年三月、合理化受諾後、初の賃金が支給された。あまりの減収に、Fさんは驚いた。「全部で五万三千円近くカットされた」のである。残業が三四時間、一時間当りの残業手当が一四〇〇円から一〇〇〇円にダウン。これで一万六千円。夜勤が八日間。これも一日四五〇〇円が三〇〇〇円になった。一万二千円である。基本給一五%カットで二万七千円。計五万二千〇〇円、これがFさんの詳細な内訳である。基本給のカット、労働時間の延長で、残業手当は三〇%近くのダウンになっていることに注目してほしい。

妻の内職は常態化し、労働者自身のアルバイトも公然と始まった。「就業規則では禁止されているのだが、就業規則じゃ喰えんたい」という。「有給休暇は、ほとんどアルバイトに使った」日増しに退職者がふえはじめた。坪内の社長就任は七八年六月十二日。以降の退職者は次のようになる。

78年	7月	8人
	8月	13
	9月	33
	10月	38
	11月	28
	12月	54
79年	1月	90
	2月	189
	3月	196
	4月	66
	5月	75
	6月	82
	7月	80
	8月	84
	9月	79
	10月	79
	11月	35
	12月	32
		計1261

退職者の急増は、会社と、そしてなんら反撃を開始しない組合幹部に対する労働者の抗議でもある。三項目合理化の受諾は、七八年二月。この月と翌三月の退職者が極度に高いことに注目された。七八年初頭、七七〇名の目標に対し、一六八一名の「希望退職者」がでた。それ以降も続く退職者。七七年十二月末、六二五名だった組合員は、二年後の七九年十二月末、三四二七名に激減していた。職場ではサボタージュが始まった。「最初は、意識的な闘いというより、とにかくきつくてもてんやうた」というのが本音だろう。だんだん意識的になった。昨年六月労愛会は「近代化闘争委員会」を設置する。対して会社は、残業全廃で対抗した。常に攻撃を加えるのは会社である。対して組合は「近代化闘争」ということで、闘争と

副部長が「注意」をした。と、その瞬間、一片のスクラップ(鉄片)が、副所長スレスレに飛んできた。副所長をつかまえ、「なにいノ、ふざけた口をきくなノ、こっちにこい」強引に工場の片すみにつれこもうとした。以来、会社幹部の単独巡視はなくなったという。こわくてできなかったののである。労愛会幹部が、造船重機労連に泣きついたのは、昨年十月のこと。労連幹部の直接の指導は、かくして開始された。現場労働者の不満造船工業会と結託した労連幹部の思惑、「反坪内」で一致した。

SSK闘争の争点は何か

「前近代的な坪内体制の打破、近代的民主的労使関係の確立」。労連幹部は、そして同盟は、今次SSK闘争を、こう位置づけた。対して、わたしたちはこう主張した。SSK労働者の闘いが、同盟幹部の思惑をのりこえ闘う労働組合の再建、反「むつ」と社会主義へ向って、力強く前進することを、私たちは希求します。そうした闘いが、長崎造船で苦闘している心ある同盟組合員の心を大きくゆり動かす力となるからです。行政改革という美名のもと、公務員労働者の首切りを企図する政府との闘いを、より発展させる力でもあります(長船労組ビラ 80年1月26日)路線のちがいは明白である。そして、今次SSK闘争は、まさに、この一点にあったといえる。ストライキが始まった。「ストライキの予告があっても、現実には、突入時間になるまで信用できなかった」というHさんも、久しぶり

水牛歌集 定価300円 送料140円
日本とアジアのあたらしい歌

一歩もひくな / この詩は棄てても / カオルの色が
の詩 / 労働者 / 白いハト / 声 / 朝日 / 管制塔
変わり / 雨をまつ / イネ / めしは天 / 管
の歌 / 機動隊 / かんがえろ / 母の歌 / 不屈の水牛
民 / よねの歌 / 翻身 / 米のうた / 人と
/ プリバ / 果しない波を渡るための歌

三里塚・野遊びの歌
スライド(54コマ)とテープ14分
貸出料(送料とも)3500円

原画 石毛博道 文 島 寛征
音楽 高橋悠治 朗読 齊藤晴彦
写真 大塚文夫 演出 龍村 仁
制作 鎌田 慧

申込は水牛編集委員会まで
郵便振替・東京4-91792

いう文字がありますので、いたずらに経営側はストでもやるがごとき宣伝を行なっていますが、決してそういうものではなく、「(労愛会)第12号 昭54年7月21日」くどくど弁解にこれ努めるだけだった。いらだつ現場労働者。会社幹部に対する意識的な「攻撃」も始まった。昨年夏のこと。ドック付近を一人で巡視していた渡部副所長は、コーラの自動販売機の前でたむろしている五、六人の労働者を見つけた。「いつまでもなにをしている。早く仕事につけ」

のストライキは「すがすがしい気持になった。例年になく厳しい寒さが続いた今年の冬。にもかかわらず、夜間のピケにも「当番以外の日も率先して参加した。」二波、三波と続くなかで、確実に労働者の意識にも変化が始まった。Fさんは語る。「第一波ストは、お祭りさわぎだった。ピケに立つても下請を迎えにきている職制と、笑顔で雑談する状態だった」だが、そのピケもだんだん強固になる。「第三波では、ついに所長の入構さえ阻止した」のである。

そんな話を聞きながら、わたしは遠く二十年前の三池闘争を思い出していた。労働者になりたてだった当時のわたしは、すすんで三池に行つた。まだ早春の夜間ピケは寒かった。たき火をかこみ、車座で夜をすごした。当時の三池労働者は、ピケ隊のそばにたむろする機動隊を「おまわりさん」と呼び、席をあげ、たき火で暖をとらせていた。当時のわたしでさえ、不快に思った三池労働者の行為。だが、現実の闘いは、労働者の意識を一度変えた。警察は「悪い者」をとりしめるのではなく、闘う者に敵対する、という真実を、自ら体験したからである。「おまわりさん」は「ポリ公」に変わり「税金ドロボウ」と変わった。機動隊の暴力にはヘルメットとヤッケで身を固め、「ホッパーパイプ」で武装した。「あらゆるストライキのかけから革命のヒドラ(怪物)が顔を出す」とレーニンはいっている。まさに、ストライキは「革命の学校」なのである。同盟路線のジレンマがここにある。坪内体制「打倒」のためには、闘いを強化し、激化しなければならぬ。だが、それは自らの自殺行為にもなりかねない要素を内包しているのである。



したがって、同盟幹部は異常なまでに「民主的労働運動」の確立と、路線防衛のために狂奔した。

破産したのは同盟路線か「闘う路線」か

わたしたちは、その一つを、長船労組が集約した一四万二四二四円のカンパ金を、労愛会幹部が受領を拒否した点にみる。二月二日のことである。おりから二六四時間という等五波ストに突入していた。「異常」な長時間スト、わたしは、すばらしいと思うより、何かがある。そう直感した。長年運動にたずさわってきた者の「カン」というべきか。闘いは頂点に達していた。同盟幹部の裏切りが始まろうとしていたのである。

応待に出た労愛会高野副会長「あなたがたの組合とは路線がちがう。もらうわけにはいかない」、一気にそういった。佐世保地区同盟の岸川事務局長は、総評五百万、全通二千万のカンパについて、そのいきさつを語った。

「総評のカンパは同盟が許可した。全通の分は、拒否しようと思っていたが、全通自ら全郵政（全通の第二組合）の許可を得てきたのもらった」

なんと屈辱的な行為ではないか。高野労愛会副会長は新聞記者の前に、総評、全通のカンパを称して、あれは火事見舞みたいなもの。とうそぶいたそうだが、大総評も全くなめられたものである。

二月末、はれて造船重機の委員長に就任した金杉秀信は、平然とこういつている。

「わが造船重機労連はこの種、支援の資金カンパ（陣中見舞）については、組織競合にかかわる阻害問題など特別の事情や意図のない限り、素直に支援行為に感謝し、受け入れる」（『同盟』2月号）。そして、今次闘争は「同盟—造船重機労連—佐世保労愛会、それを包む金属労協や政策推進労組会議の陣立て」（同）といい、「ふだん路線上の問題などで関係のなかったり、薄かった各組合が——佐世保のたかいかを人権闘争と位置付け、支援を惜まないとするならば、彼らの「周囲に位置し、支援を続けてほしい」（同）ということになる。

SSKの現状は、同盟路線の破産。おそろおそろつけ加えた日本共産党のピラに、高野は、今後かかる言動はつつしんでほしい」といったそうだが、はや、なんともいえない現実ではないか。JC主導の右翼的労戦統一に、その本質をあばき、公然と対決を決



意している単産は、皆無に等しい。「パス」に乗り遅れまいとする総評内の争いは、今次SSK闘争にも鮮明に露呈された。まさに、破産したのは同盟路線ではなく「闘う路線」であった。

社会党ならびに共産党員諸君。次の労連委員長金杉秀信の言葉に

なんと反論するつもりか。
「SSK労組労愛会には社会党や共産党色の組合員もいるが、一糸乱れぬ団結力があつたから固い壁を突き崩せた」（『朝日新聞』80年2月14日）

そして「闘う組合」「反同盟」の労働者諸君、同盟会長宇佐美忠信の次の言葉になんと答える。

「労働戦線統一には全く別の組織がお互いに信頼感を持つことが大事。総評系組合は、同盟系組合に対して労使ゆ着だという先入見を

持っているようだが、労愛会の闘争を見てもわかるように経営者があまりに理不尽な場合はストで立ち上るのが民主的労働組合の本当の姿。今回の労愛会闘争は、先人見を取り除き信頼感をつくる、という意味で労働戦線統一に役立つだろう。〔長崎新聞〕80年1月29日
既成「左翼」を完全になめきつた同盟・JC御用幹部の思いやりが、躍如としている。その彼らにとって、公然と反同盟を語り、反むつ、社会主義をめざす労働運動を主張する組合とSSK現場労働者との接近は「断固」として拒否しなければならない。SSK現場労働者とわたしたちとの連帯がよりいっそう強まることこそ、彼らにとって、まさに脅威である。カンパを拒否した同盟幹部の姿勢の中に、同盟路線の「強さ」と同時に弱さを見た。

「四国の山猿」と「三菱紳士」

- 一回きりの顔見せで
 - 二目とみられぬご教祖様よ
 - 三度のメシより金もうけ
- 四国の山猿ここにあり

「狂島音頭」である。かかる落書きが、SSKの便所には蔓延したカベだけでは足りず、天井にまで書きこまれた。坪内寿夫への怨念をこめ、国竹七郎への抗議をこめて。

今次SSK闘争が終結した段階で、ある大手造船の会社首脳は、こういったという。

資本の攻撃と「坪内イズム」とは、一体どこがちがうのか。「四国の大将」坪内寿夫は、少々ガムシヤラにそしてロコツに資本の意図を貫徹しようとした。組合を「無視」し、ルールを守らずに。

いま、坪内寿夫は松山市の病院で療養中だという。「金融機関、大株主各社のひやかさも考慮すれば「坪内」対「総労働・総資本連合」ともいへべき構図になった。〔経済界〕80年3月11日）そして坪内は「敗北」した。病院のベッドの上で、坪内はくやしがつているのだろうか。それとも「会社の譲歩は、給料やボーナスを（段階的に）二年前の水準に戻すだけ……一方、再建のまだ初期の段階で、二年分の新造船受注を抱えようとは、悲観一色だった社長就任当時だれも夢想だにしなかったにちがいない。この両面からの目算違いを相殺すれば、結局譲るのがプラス——と再建請負師は読み固めたのではなかるうか。〔朝日新聞〕80年2月19日）だとすれば、坪内は一人、ほくそ笑んでいよう。

坪内寿夫は、自著『裸の報告書』でこう書いている。「私は経営方法のひとつとして平島どつくグループの艦に退却用のスクリーンをつけている。退却経営のときには慌てずにこいつをフル回転させればいいのだ」そして「これは毛沢東の戦略と同じだ」とつけ加えている。

「四国の山猿」が「四国の紳士」として登場してこよう。労愛会幹部、造船重機は歓迎するだろう。

「紛争は一応決着したが、再建はこれから。正常な労使関係を確立して企業の社会的運命を果すよう努めたい」〔長崎新聞〕80年2月21日）

「坪内さんの労務感覚は、約二十年ぐらい前なら通用したかもしれないがね……」〔経済界〕80年3月11日）と。正確にいうなら、戦前・戦中の感覚というべきではないだろうか。

と同時に、その造船大手でも「坪内イズム」に劣らぬ反動攻撃が職場労働者におそいかかっている現実を、わたしたちは知っている。同盟幹部いうところの「近代的労使関係」の中で。

たとえば、三菱重工名古屋機器製作所をみよ。「再建の歌」ならぬ、そのものズバリ「戦陣訓」が登場した。昨年の秋から。「栄光の超一流の冷工部マンになるために」との副題がついたこの「戦陣訓」は、毎朝のミーティングで全員が斉唱する。その日の当番が前に出る。

「不肖○○○○、戦陣訓を読みます。ご唱和お願いします。構え」全員が「戦陣訓」を両手にもち前につき出す。

- 〇燃えるような熱気・情熱をもて！
- 〇この燃えつくすような熱気・情熱こそが意識変革の鍵だ！
- 〇寸刻の時間も無駄にしない。時間の鬼となれ！
- 〇同僚相和し、組織に忠誠を尽すべし！
- 〇取り組んだら離すな。目的完遂までは死んでも離すな！
- 〇気合一発、俺がやらにやかだれがやる。信念もって行動せよ。立てた計画必ず達成！

「死の商人」三菱独占は、確実に不吉なかま首をもたげつつある。同盟御用幹部と一体となって。されど、三菱の各職場で貫徹される

国竹会長はかく決意を語っている。

職場の労働者は、かかる会社幹部、組合幹部を今後もし続けるのであろうか。六〇〇時間に及ぶ長期闘争を闘い抜いた労働者は、組合歴二九年の国竹を乗り越え、造船重機金杉を狼狽させる、そんな闘いで答えてほしい。

そのとき、わたしはSSK労働者とともに、労働者の「全面勝利」を語ろう。

舎/球/気/軽/



写植・版下

- チラシ・パンフレットの製作
- お引き受けします。
- 印刷・製本はもちろん、編集作業も受け請います。
- ハングルの写植・印刷もできますので御利用ください。

〒160 新宿区高田馬場二一七一一

コーポ高田三〇六
日本AA作家会議事務局内
☎205-2794

〈ハングル〉のつづり方と発音

李銀子 ウソジャ

ハングルのつづり方

この連載で私が試みようと思うのは、文字そのものの定義とあわせ、〈ことば〉を通して知ることのできる生活や文化についてつづることである。

前者については、まず〈ハングル〉が子音と母音からなる音素文字で、一音節を初声、中声、終声に三分し、それらを互いに組み合わせることにより一音を発する。また、それらの文字の成分となる子音と母音がどのように成立したかについてまとめてみた(連載Ⅱ)が、今号はそれにつづき、実際に単語を一つ一つ並べ、そのつづり方と発音についてまとめてみようと思う。

〈ハングル〉の一音節は、「子音+母音」「子音+母音+子音」の組み合わせに大別され、つづる場合は、子音、母音ともに「右から左へ、上から下へ」の原則でつづる。
このことを念頭におき、文字の形態別に単語を並べてみることにしよう。

- (1) 母音が子音字母の右に来るもの。
例 아, 야, 어, 여, 에, 예, 예, 이
- (2) 母音が、子音字母の下に来るもの。

例 오, 요, 우, 유, 이

- (3) 子音が、母音字母の左上に来るもの、
(二重母音)

例 외, 위, 의, 와, 워, 웨, 웨

- (4) 終声 받침 [pat-achim] は、「子音+母音」の下でささえる。

例 알, 양, 언
봄, 운, 숙
왕, 웅, 휘

以上の四つが組み合わせの種類であるが、では、(1)から単語をつくってみる。

- (1) 어머니 [a-mo-ni] 母 (注・■は子音)

아버지 [a-ba-dzi] 父

아이 [a-i] 子ども

오빠 [o-ppa] 兄(女が呼ぶ場合)

누나 [nu-na] 姉(男が呼ぶ場合)

- (2) 우유 [u-yu] 牛乳

무우 [mu-u] だいこん

우주 [u-dzu] 宇宙

(3) 외국 [0-guk] 外国
의자 [wi-dza] いす
귀 [ky] 耳

(4) 밥 [pap] ごはん
책 [chek] 本
손 [son] 手
언니 [on-ni] 姉(女が呼ぶ場合)
형님 [hyeng-nim] 兄(男が呼ぶ場合)

発音の注意

(1) 「어머니」の「어」は、口を半ばひらく中間音。慣れるまでむずかしいかもしれない。
「아버지」の「지」は、「ㄹ」が口を横に開くのでカタカナの「イ」を「ジ」にして発音するとよい。
「오빠」の「ㅍ」は声音緊張する硬い音。どの奥から出すのがコツ。

(2) 「우」は、口唇を前にとがらせばよい。また、ここで注意したいことは、「우우」である。〈朝鮮語〉は原則として初頭にくる音を澄んでよみ、2字目にくる音は濁る。

よって「우」が頭子音の場合は「[tu]」だが、この場合「二」字目にきているので「[dzu]」となる。これを覚えておこう。

(3) に登場してくる母音は二重母音である。二重母音は、はじめに子音の真下にある母音をよむ準備をし、その口の形のまま右側の母音を発音する。

〈例〉の「외」を試してみよう。
まず「ㅍ」の準備(口唇をまるくする)。その口の形のまま「ㅣ」の音を出す。この場合「ㅣ」を「ㅍ」にちかづけて発音するとやさしい。

(4) 終声 받침 (パッチム) は、支えるという意味である。〈받침〉については、第2号 22ページの表を参考にしてほしいのだが、口唇を閉じるときや、舌をかむ場合の区別をハッキリつけることに注意したい。たとえば、〈例〉にある「밥」は、「ㅍ」 받침なので口唇を閉じなければならない。

焼肉屋さんのメニューに「비빔밥」というのがある。(ハングル)でつづるとそれは「비빔밥」である。
カタカナ書きの「バ」をそのまま読むと口唇は開いたままになるが、「밥」は前述のとおり口唇を閉じる。

また「비빔」 [pibin] は「밥」を修飾する連体形で「まぜる」という意味のことば。日本式「まぜごはん」は、はじめからごはん、に具がまざっているが「비빔밥」ははじめはごはんの上に具がのってあり、それに「고추장」 [ko-chu-dzang] (からしみそ) を少しおとし、唾液が出てくるまで「술가락」 [sul-ka-1-tak] (スプーン) でかきまぜて食べるのが、食欲を増し、おいしさの秘けつでもある。
今度焼肉屋さんへ行つたときにはさつそく「비빔밥」 [pi-bim-pap] と注文し、食欲を増すまで、ていねいにかきまぜてみよう。

復習

では、本号に登場した単語を発音記号なしにより、その意味を覚えよう。おぼえる際実際にものを見ながらおぼえるとよい。

編集後記

- (1) 어머니, 아버지, 아이, 오빠, 누나
- (2) 우유, 무유, 우주,
- (3) 외국, 의자, 귀,
- (4) 밤, 책, 손, 언니, 형님
- (5) 받침, 비빔밥, 순가락

なお、アジア太平洋資料センター「PARC 語学塾」で〈朝鮮語講座〉をひらいています。

第3期は四月中旬より九月中旬まで(8月休講)。この連載をしだいにテキストに利用したいと思っています。

詳しいお問い合わせは、アジア太平洋資料センター 東京都千代田区神田神保町1-30正光ビル4F 電話03(291)5901まで。

1	[a-me-ni] [a-ba-dzi] [a-i]
2	[o-ppa] [nu-na]
3	[u-ju] [mu-u] [u-dzu]
4	[Ø-guk] [wi-dza] [ky]
5	[pap] [chek] [son] [an-ni]
	[fyeng-nim]
	[pat-chim] [pi-bin-pap]
	[sut-ka-rak]

読者からの手紙の一部を紹介します。

「2号では『三里塚ワンパック』がよかった。『土』についた関い、自分の『ことば』で語る関い、そしてそれらの関いがあちらこちらにあつてお互いに交流し認めあうことが必要だと思ふ。」(横浜市・Eさん)

「水牛通信、それがさまざまな運動の通底器であり(新しさ)を感じます。2号には絵がみちあふれ、しなやかさが躍動していたのに3号ではすこしばかり淋しい気がしました。限られた平面なのですから、視覚を解き放つようにして下さい。」(杉並区・Tさん)

ミンダナオの農民の生活とたたかいをえがいたフィリピンのスライド「もうたくさん」を次号で紹介します。台本のなかには、いわゆる「台本」とともに、何のためにつくったのか、どのようなかたちで集会をもち、進行するか、見終ったあとどのように討論するか、その具体的な質問事項、それからスライドそのものの取りあつかいかたまで、簡潔に文章化されています。読むだけでなく、そのやり方で実際にスライドを見、話し合う集会も予定しています。くわしくは5号で。(M)

購読の御案内

※本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

※申し込みと送金は郵便振替(口座名 水牛編集委員会、口座番号東京四一九一七九二)または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということ を明記してください。

※購読料は送料とも一年分三〇〇〇円半年分一八〇〇円です。

水牛通信

第二巻第四号

一九八〇年四月十日発行

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-13

八巻方

電話〇三(四二五)九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 (株)トライプリントショップ